世田谷村日記

石山修武

三月十二日

午前中大学N棟椅子ゼミ。M0(ゼロ)のプレゼンテーションをクリティーク。本当にM0くらいの子供は皆どうして良いかわからぬママなのが良くわかるくらいのものである。午後赤坂プリンスホテルへ。芸術選奨授賞式。賞状と副賞をいただく。演劇の部受賞の池内淳子さんの受賞の言葉。彼女が主演で出ていた、フーテンの寅柴又暮情であったかの映画中の科白に似て、「ありがとうございます・・・沢山言う事を用意してまいったんですけれども・・・胸がドキドキして何も申せません。舞台の上ではアガッたことはないんですけれども、・・・本当にありがとうございます。」と同じ間、同じよくようで、要するに女優だなあと思った。演技者の業だろう。同席していた家内など、「あんなベテラン女優でも緊張してたわね」だって。女優があがるわけネェだろ。良い芝居を見せてもらった。夜世田谷で打ち合わせ。

三月十三日

昼過ぎ竹内ラウンジで電気学科の松本石山、建築の西谷先生と会合。松本先生は高等学院の同級生。西谷先生は後輩らしい。早稲田は学院を大事にしないと亡ぶぜ。早稲田の在野精神の健全な部分の大半は高等学院が作っている。だって東大受験に失敗して、それで結果早稲田の先生になってしまった先生に本来の在野精神が育つワケは無い。早稲田の中心は反権力なんてケチな事ではなく、深い在野の精神、つまり何ものにも束縛されぬ原っぱの自由という理想を忘れぬ精神の方向性そのものだろう。

午後二時過より、理工学部将来構想シンポジウム。パネリストとして登壇して発言したが、我ながら下らん事をしゃべっていた。私は学内政治には向いていない。中途退席と言うわけで只今山ノ手線で浜松町経由羽田へ。今日から佐賀だ。十七時羽田ターミナル佐賀便待合い室。室内原稿目ざわりデザインの対象がまだ決まらない。担当編集者には悪いけれど本当にギリギリまで書き始められないんだよな。待合室で同じ佐賀ワークショップ行の難波さんに再会。久し振りだ。難波さん浮かぬ顔をしている。何かあったなと思ったら案の定共通の古い友人に関する不幸としか言い様のない話しを聞かされた。五〇を半端過ぎての友人というのはお互いそれなりの歴史を経ているから、それなりの嗅覚知覚を働かせたいくつもの峠を越えてきている。ある種の自然な関係になっているような気もする。危かったり、ややこしかったり、いつもグラグラ変っていたりの人間は自然に避けるようになる。それで生き残っているのが五〇代の友人だ。だから古い友人、つまり生き残らなかった友人の事は、もう自然にほっとけば良いのだ。それがお互いの為だし自然である。と機内でこんな風に考えた。人生酷薄なところがある。良い友人を持つのは面白さの極であるが、それなりの淡々とした努力も必要になる。どう言うのかな、互角平等でいようとする努力みたいな事かな。つまり、ミラノで難波さんにブラマンテを案内されたら、これではいけないと思ったり、難波さんの建築にブラマンテはどう反映される可能性がありや、なしやと考えたり、の努力はしているんだな。であるから、古い友人にまつわる不幸としか言い様の無い話はほっておくしかない。五〇半端を過ぎて、在っても聞いてもならぬ話のような気がしま

す。佐賀ではこの話しは二度と聞かぬつもり。イヤーッ、シシリアは楽しかったぜ。そう言えば難波さんはシシリアにあの事件（9月11日の）で行けなかったんで、俺の話がともすればシシリアに行きがちなのがイヤだっただけなんだろう。それなら、そう言えばよいのに。

三月十四日

お馴染みの佐賀ニューオータニＨＯＴＥＬで目覚める。今日のレクチャー第一講の準備をする。八時難波さんとホテル内レストランで朝食。歩いて早稲田バウハウススクール校舎へ。七〇名程の参加者。レクチャーは九時より十二時まで。途中十分の休息をはさんで、準備不足ではあったけれど、手を抜かずやった。午後、室内原稿五枚、および家内が参加した旧外務省研修所保存に関する原稿三枚書く。

三月十五日

今日は晴れそうだ。一日さわやかに暮らせそうである。八時朝食。朝は難波和彦の講議。次第に歴史家の相を呈してきたな彼は。後半の講議が良かった。池辺陽論として、又自分を自作を使わずに語り、余すところが無かった。創造的作家論を一編書くのが私の目標の一つだが、参考になった。建築家にとっての作家論はその建築家の品格を決めてしまう様なところがある。当然、建築家は自己表現の固まりである。その我を消す力を持たねば作家論は書けない。我が出過ぎた作家論は品性に欠ける。つまり建築家にとっての作家論はその建築家の品格の度合を露出してしまう、リトマス試験紙でもあるのだ。自作つまり自分に一切触れずに作家論を書くとはそういう事だ。重源論から磯崎新論に目標を変えた今、他人の作家論は気になる。昼は文雅で辛いジャワカレー。午後ちょっと原稿書き。十六時より母の家の課題クリティーク。二三時半修了。安藤向井のＷＯＲＫをチェックしてからホテル戻り〇時二〇分。バスを使い頭を洗って休む。一時過。あらゆる現場で若い人の新しい感じはまだ感じられぬが、無駄な時間では無いような気もする。鈴木博之に言われた、このスクールが私の命取りになるかも、が自分でも自覚できているのだが、こういうやり方でしか暮らしてゆけないような気もするんだね。仕方ない。なるようにしかならないだろう。明日は七時三〇分レストランで鈴木さんと朝食の予定。鈴木氏のレクチャーを半分しか聴けないのが痛い。この年でまだ固まらずにいられるのはこのワークショップのレクチャーを全部勉強しているお蔭なのも実感してるから。本を読むのが苦手になってきているが、人の話を聞くのは好きなのだ。広島の木本君には聖徳寺の観音様の天蓋をやってもらおうか。

三月十六日

七時起床。薄曇り。七時三〇分鈴木難波両氏と朝食。学校へ歩く。九時鈴木博之レクチャー。パレルモ大聖堂宝物館で見た星型みたいな聖体顕示台の造形の進化を枕にアートとクラフトの違いを語源を追いながら、次第に西欧から日本へと辿り着かせる離れ技である。細部も嵌め込まれ凄いんだ。さてそれで近代の宿命でもあるアート（デザイン）とクラフトの分離分業の意味は、というところで十時十五分、バスの時間になってしまった。残り半分聞けず。単純な未来展望など言う筈もない人物であるのは知り尽くしてはいるが、後半聞きたかった。明日佐賀に戻ったら森川に復習させよう。というわけで今、福岡空港へのバスの中。しかし

なあパレルモ大聖堂で聖体顕示台の何かをメモしていたのは気になっていたのだが、そのイタリア語名、英語名に発して、その形体の進歩、変化から、アーツ＆クラフツ運動を説き始めるとは恐れ入った。世の中には敵わぬ人がいるものだ。只今二〇時三〇分小田急線で成城学園に向かっている。十六時よりの中央林間での有能福祉法人理事会は十九時五〇分まで、県議市議を混じえて諸々の相談を続けた。結局石山研は三月中に森の学校の完成予想図を仕上げる事になってしまう。

三月十七日

朝五時前世田谷村で目覚める。昨夜は中央林間での有能福祉法人設立準備会から二十一時に帰宅してすぐに倒れる様に眠ってしまった。池原義郎先生から御ていねいなお手紙いただいたので、御礼を書かなくてはいけない。今日は午前中星の子愛児園現場。一度帰宅して夕方九州へ戻る予定。ラップランド、ナショナルロマンティシズム、ラテン系生産システム、パレルモ、ワーグナー、プレパルテノン、鈴木レクチャー、頭がなんだか廻転し始めたような気がする。うまく焦点が浮かび上がれば良いのだが。結局九時過起床。屋上菜園に上り、水をたっぷりまく。まばらだが色んな花が咲いていた。畑の中の通路に転がせていたサオや小木片を片づけたりで小一時間過ごす。

昼前現場、若干の指示を出し引き上げる。ぜいたくを言えばキリが無いが大体思う通りに出来上がってきた。ツリーハウスと現代っ子ギャラリーが混じったものにはなった。子供は喜ぶだろう。次女の友美は今日から菅平高原正橋孝一さんの家つまり私の若い時の仕事である開拓者の家へ泊りスキー。長男タコ踏み男雄大も合流するらしい。我家のガキ共の親離れは素早い。十七時過羽田空港着。家内に車で空港まで送ってもらう。環八は混んでいてどうなる事かと思ったが結果はゆとりを持って着いた。車の中で「どうするんだコレワ」などとワメイていたので、羽田での別れの際、「バーカ」と言わんばかりの家内の表情が露骨に私を軽べつしているのであった。佐賀空港には誰か来てくれているのだろうか。結局東京に一日戻って佐賀に宿題を三つ持って帰ることになった。藤井晴正邸の構造チェック。聖徳寺の中心（核）の設計。森の学校。北海道からの依頼は少しばかり待っていただくしか無い。

佐賀便でつれづれなるままに考えた。人間は何故音楽という人工的な音の配列を作ったのだろうか。私は双方の耳が難聴気味なので若い頃から音楽を鋭く聞くことができなかった。双方の耳管の中で年がら年中キーっていう耳鳴りがして一時も消えない。それで微妙な人工音を聴き分けられない。特にセミの鳴き声というか羽根をすり合わせる音なんて聴いた事がないのだ。それで自然に音に関心を失くした。この事は私の思考に関係があるのだろうか。年をとって私の耳は益々聴こえ難くなっている。身の廻りの空気気配には耳鳴りのキーンが常に入り続ける。環境は空気の流れと澱み方、匂い音などの基礎的な要素と、それを把握する社会性を当然帯びた人間主体の知覚の関係交差で生成するわけだ。それを考えるに、私は音への感知力が人並み外れて劣っているわけだから、いつも他人とは異なる環境を感知しているわけだなコレワ。難聴は私の如くに確実にハンディキャップなのだとすれば、難知、つまりきき分けの無い愚鈍な人も又ハンディキャップとして考えねばならないのではないか。要するに学生は未熟である。これは当たり前。未熟も又ハンディキャップの変種であり、近代建築はそれが働くべき、働きかけるべき対象から排除してきた。

要するに大学や高校の施設である学校は近代建築様式は望ましくないと私は考えるにいたった。

飛行機が降下し始めたのでメモを続けることが出来ない。残念。